
保育者養成校の短期大学生における SDGsに関する認識

齋藤 めぐみ

Attitude Toward SDGs Among Junior College Students
of Early Childhood Education Majors

Megumi SAITO

キーワード：SDGs、ESD、大学生、保育者養成

本研究は、保育者を目指す本学の学生のSDGsに対する認識を明らかにするとともに、保育者を目指す学生が、持続可能な社会の創り手となるべく、ESDの実践のあり方を検討することを目的とした。各目標をふまえて学生が、保育で行えそうだと思うSDGs活動について、“状況に関係なく職員が誰にも平等に関わり、その精神を子どもたちに見せる”の得点は高く、“新しいものを積極的に取り入れ、子どもたちの知的好奇心や探究心を育むこと”の得点は低かった。今後、好奇心、探究心をまずは学生が育めるような大学でのESDを考える必要があることが示唆された。

はじめに

持続可能な開発目標（SDGs）とは、すべての人々にとってよりよい、より持続可能な未来を築くための青写真である。貧困や不平等、気候変動、環境劣化、繁栄、平和と公正など、私たちが直面するグローバルな諸課題の解決を目指す。誰一人置き去りにしないために、2030年までに各目標・ターゲットを達成することが重要である（国際連合広報センターHP）。

2030年までに達成するために教育の場においては、持続可能な社会の創り手を育む教育（ESD・Education for Sustainable Development）が求められている。

文部科学省「持続可能な開発のための教育」にはESDについて、以下のように書かれている。“ESDは、SDGsの目標のうち、目標4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット4.7に位置付けられた。一方で、ESDは、SDGsの17全ての目標の実現に寄与するものであることが第74回国連総会において確認されている。持続可能な社会の創り手を育成するESDは、持続可能な開発目標を達成するために不可欠である質の高い教育の実現に貢献するものである。具体的に身につける力は、

1. 批判的に考える力

2. 未来像を予測して計画を立てる力
3. 多面的・総合的に考える力
4. コミュニケーションを行う力
5. 他者と協力する力
6. つながり尊重する態度
7. 進んで参加する態度

であり、知識・理解に留まらず、学びを活かし、様々な問題を「自分の問題」として行動する「実践する力の育成」を目指す。探究的な学習過程を重視し、学習者を中心とした主体的な学びの機会を充実し、体験や活動を取り入れることが望まれる。”

実際には、平成29年3月に幼稚園教育要領及び小学校・中学校の学習指導要領が告示され、教育の場において「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられた。

幼稚園教育要領（平成29年3月告示）には、“これからの幼稚園には（中略）一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる”。と記載されている。

従って、幼稚園教諭を目指す保育者養成校において、学生がこのことを理解すると同時に学生自身もあらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが望まれる。

敬愛短期大学総合子ども学研究所では、2024年度「子どもとSDGs」をテーマとして、主に、“健康と福祉を全ての人に（G3）”、“質の高い教育をみんなに（G4）”、“住み続けられる町作り（G11）”を目標のもとに活動を行ってきた。「もったいないばあさん」の作者真珠まりこ氏の講演や卒業生との共同研究会、子育て支援活動の開催と学生の参加等である。しかし、大学としてSDGs関連の事業を展開することだけが大学の役割ではなく、大学の主である学生がSDGsとどのように関わるのかを検討する必要がある。その際、学生のSDGsに関する認識を知ることが望まれる。

そこで本研究は、保育者を目指す本学の学生のSDGsに対する認識を明らかにするとともに、保育者を目指す学生が、持続可能な社会の創り手となるべく、ESDの実践のあり方を検討することを目的とする。

具体的には、研究1において、先行研究より他大学で行われている大学生のSDGsに関する認識調査を概観し、本学学生に対する認識調査項目を検討する。研究2において、認識調査を行い、本学学生のSDGsに関する認識を明らかにする。その上で保育者を目指す学生が、持続可能な社会の創り手となるべく、ESDの実践のあり方を考察する。

【研究1】

方 法

まず、わが国の論文検索サイトであるCiniiにおいて“大学生 SDGs”をキーワードに検索し、抽出された論文のうち、大学生のSDGsに関する認識調査が行われている研究を選出し、概要をまとめた。

結果と考察

対象となる先行研究として、108の論文が抽出された。抽出された論文のうち、認識調査が行われていると見なされる論文が27、学生が関与したSDGsの実践報告についての論文が19、SDGs授業の検討に関する論文が11であった。その他の論文が57であり、大学生が関連するSDGsの研究は多岐にわたることがわかった。

認識調査が行われている論文のうち、一般的な認識度の調査でない論文、今回入手できなかった論文を除き、6論文について概要をまとめた（表1）。

これらの研究において、SDGsの認識、実践していること等共通した調査項目が見受けられた。結果として、大学生はSDGsの言葉は知っているが詳しい内容となるとよくわかっていないことがわかる。SDGsを知ったきっかけとしては、テレビやニュースなどもあるが、中高大での授業であることが多かった。また、SDGsを考慮した行動で実践していることについては、ゴミの分別、ゴミの削減、リサイクル、食べ残さない、エコバッグ、マイボトルの使用であった。就職活動を意識した企業におけるSDGsの関心については、SDGsを推進しているか否かを企業選択の理由と考えている学生は少なかった。

表1 大学生を対象としたSDGsの認識調査を行っている先行研究

著者	年	対象者	質問項目	結果
岩間ら	2021	教員養成系 大学生 119名	SDGsの認識や理解度、SDGsの指導のために行いたい教科、現代社会の困難、課題、世界の健康、福祉、教育、環境、消費で懸念すること、SDGsに関わる世界情勢の認知度、将来の進路、持続可能な社会のために自分が取り組めること	30.3%が言葉も意味、内容がわからないと回答した。 <u>ゴミ、エネルギーの削減、リサイクル等が実践できることの上位</u> であった。また、教員養成の大学生としてできることに、教育の充実、世界情勢を子どもたちに教えるとの回答が見られた。一方で <u>SDGs関連行動が難しいと感じている学生が多かった</u> 。幅広い視点で想像する力がなければ児童生徒への指導は難しい。
井村ら	2021	大学生 108名	SDGsの認知、SDGsのロゴ・アイコンを見たことの有無、17の目標があることを知っていることの有無、169のターゲットがあることを知っているかの有無、国際的な目標であることを知っているかの有無、SDGs未来都市という言葉聞いたことの有無、に加えて廃油石鹸について	学生のSDGsの認知度は65.7%と高く目標に対して興味・関心はあるが、具体的な内容の認知度は低かった。 <u>SDGsに関する情報の収集や行動には至っていないことがわかった</u> 。また、廃油石鹸の使用意思がある学生はSDGsの「福祉と平等」、「産業と経済」、「自然と環境」のすべての目標の興味・関心度が高かったことから廃油石鹸は環境教育の学習教材に有効であることが示唆された。
尾上	2023	短大生 82名	小中高での学習の有無、普段の生活で意識していること、特に関心のある目標、特に大切にしている目標、具体的に取り組んでいること、どの程度貢献できそうか、どの程度大切だと思うか？	認知は、ジェンダー、貧困、不平等、公正の項目で関心が高かった。また、実際の取り組みは、 <u>ゴミの分別、リサイクル、削減、食べ物を残さない、の順</u> で多かった。
伊坂ら	2023	大学生 218名	環境問題関連の質問項目に加えて、SDGsの認識に関わる項目として、SDGsを知っているか？SDGsを知るきっかけ、SDGs達成のために行動すべき主体（政府、企業、その他）、日常生活での実際の行動、SDGsのイメージ	SDGsをよく知っている、まあ知っているを合わせて98.6%であり認知度は高かった。 <u>知るきっかけは高校や大学での授業</u> が知るきっかけとなっているの回答が多かった。SDGsや環境に配慮する意識が高い意識高群と低い意識低群、中間群の3群の間で環境配慮行動には差がなかった。 <u>環境に配慮する意識が高くても、それが行動につながりにくい</u> ことを示している。

著者	年	対象者	質問項目	結果
佐藤	2023	女子大生 291名	SDGsの認識、SDGsを知ったきっかけ、耳にしたことがある目標、大切（関心がある）だと思う目標、誰が積極的に取り組むべきか、企業に取り組んでほしいこと等	認知度は98%。知ったきっかけはテレビ、ニュース、次に中高での授業。関心が高い目標はジェンダー平等を実現しよう、貧困をなくそう、人や国の不平等をなくそう、平和と公正をすべての人に、関心が薄いのは産業と技術革新の基盤をつくろう、エネルギーをみんなにそしてクリーンに、陸の豊かさを守ろうであった。取り組んでほしいところは国・自治体、取り組んでいることとして、エコバッグ・マイボトル、食べ残しをしない、ポイ捨てをしないの順であった。SDGsを積極的に推進している企業への就活関心度は25%であり高くなかった。
藤井	2024	大学生 351名	SDGsの認識、SDGsを推進している企業のイメージ、SDGsと教育関連項目について、SDGsを意識した行動の有無、講義で耳にしたことの有無、ポスターなどを目にしたことの有無、中高時に学習したことの有無、誰かに話しをできるか？	SDGsの認識については、94%が認知していた。SDGsを推進している企業について、イメージはプラスだが、就活にSDGsはあまり影響していない。 <u>講義で聴いたりポスターを見たことはあってもSDGsを意識した行動には至っていなかった。</u> 実践に向けて誰かと話ができる環境づくりが大切である。

全体的に大学生は、SDGsについて言葉は知っているが詳しい内容がよくわかっていない、いくつかの自分の周辺で意識している行動はあるが、社会を基盤とした行動を行う等の具体的な行動に結びついていないことがわかった。さらに、SDGsを知るきっかけでは授業が多い。教育がSDGsに果たす役割は大きいと考えられる。

研究2では、ほぼ共通な項目であったSDGsの認知度、SDGsを考慮して実践している行動、岩間（2021）の教員養成系大学生を対象とした調査でのSDGsを指導したい教科、の質問を参考として、保育で行えそうと考えられることを調査項目に入れることとする。

【研究2】

方 法

(1) 対象者及び依頼方法

保育者を目指す短期大学の学生280名。

1年生160名、2年生120名。2024年8月30日（金）と9月6日（金）に行われた後期ガイダンス時に、アンケートへの回答を口頭で依頼をした。説明の際、学籍番号の記入を求めるが、回答されたかどうかの確認のためだけに使用し、個人を特定することなくデータを使用することを説明した。同意をした場合にアンケートへの回答を記入するよう依頼した。なお、本研究は敬愛短期大学倫理委員会の承認を得ている（承認番号 敬短大第315号）。

(2) 調査期間

2024年8月30日～2024年9月13日

(3) 調査方法と調査項目

Google フォームで作成したアンケートへの回答を求めた。調査項目は先行研究、株式会社ネクサス「今さら聞けないSDGsの基本と保育園ができる取り組み」を参考として、以下の通り5

項目とした。5) については、各目標に関連した保育の中での実践例を挙げ、行えそうと思う程度の回答を各目標ごとに求めた。1) は、言葉も意味も知っている：3、言葉だけ知っている：2、全く知らない：1の3件法、2) は、よく知っている：3、時々見る：2、見たことがない：1、の3件法、3)～4) は自由記述式として回答を求め、言葉が異なっても同じ意味であると判断したものについては、まとめた。5) は、絶対できそう：5、できそう：4、ある程度できそう：3、できそうもない：2、絶対できそうもない：1の5件法で回答を求めた。

1) SDGsの認知度

2) SDGsアイコンの認知度

3) 日頃から意識して行っているSDGs行動

4) 短大で行えそうだと思うSDGs活動

5) 各目標をふまえて保育で行えそうだと思うSDGs活動の行えそうと思える程度

目標1 貧困をなくそう：あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ

〈保育で行えそうなこと〉

子どもと家庭に寄り添い、子どもの貧困問題の解決に寄与すること

目標2 飢餓をゼロに

〈保育で行えそうなこと〉

栄養に配慮した給食の提供と食育を通した食の大切さを子どもたちに伝えていくこと

目標3 すべての人に健康と福祉を：あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する

〈保育で行えそうなこと〉

子どもの最善の利益を確保し、子どもたちが心身ともに健やかに育つ場を提供すること

目標4 質の高い教育をみんなに：全ての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

〈保育で行えそうなこと〉

質の高い保育を提供することそのもの

目標5 ジェンダー平等を実現しよう：ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る

〈保育で行えそうなこと〉

性別の固定観念にとらわれない保育を提供し、子ども一人ひとりの個を尊重して関わること

目標6 安全な水とトイレを世界中に：すべての人々に水と衛生へのアクセスを確保する

〈保育で行えそうなこと〉

普段何気なく使っている水の大切さを伝え、安全な水と衛生環境について子どもたちと学ぶこと

目標7 エネルギーをみんなに。そしてクリーンに：手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する

〈保育で行えそうなこと〉

エネルギーの大切さを子どもたちと学び、限りある資源の使い方について共に考えていくこと

目標8 働きがいも経済成長も：全ての人々のための包摂的かつ持続可能な経済成長、雇用およ

びディーセント・ワークを推進する

〈保育で行えそうなこと〉

職員一人ひとりにとって働きがいのある職場づくりを行うこと

目標9 産業と技術革新の基盤を作ろう：レジリエントなインフラを整備し、持続可能な産業化を推進するとともに、イノベーションの拡大を図る

〈保育で行えそうなこと〉

新しいものを積極的に取り入れ、子どもたちの知的好奇心や探究心を育むこと

目標10 人や国の不平等をなくそう：国内および国家間の不平等を是正する

〈保育で行えそうなこと〉

年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、経済的地位やその他の状況に関係なく、職員が誰にも平等に関わること、その精神を子どもたちに見せること

目標11 住み続けられるまちづくりを：都市を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする

〈保育で行えそうなこと〉

地域における保育園の立ち位置を明確にし、地域に開かれた園づくりを行うこと

目標12 つくる責任、つかう責任：持続可能な消費と生産のパターンを確保する

〈保育で行えそうなこと〉

ゴミの削減や再利用などを通して、子どもたちに「もったいない」精神を伝えること

目標13 気候変動に具体的な対策を：気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る

〈保育で行えそうなこと〉

季節ごとの気候の変化を感じながら、異常気象や自然災害への対策について子どもたちが自分で考えられるように導くこと

目標14 海の豊かさを守ろう：海洋と海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する

〈保育で行えそうなこと〉

海洋汚染などの環境問題や海の生態系について子どもたちが学べるように、身近なものに置き換えて海の大切さを伝えること

目標15 陸の豊かさも守ろう：森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る

〈保育で行えそうなこと〉

子どもたちに緑や生命の大切さを伝え共に守ろうとすること

目標16 平和と公正をすべての人に：公正、平和かつ包摂的な社会を推進する

〈保育で行えそうなこと〉

子どもの人権を尊重し、虐待や差別、偏見のない環境をつくること

目標17 パートナリーシップで目標を達成しよう：持続可能な開発に向けてグローバル・パートナーシップを活性化する

〈保育で行えそうなこと〉

17のゴールに向けた取り組みを通して地域社会に貢献すること

結 果

(1) SDGsの認知度

SDGsの認識についての回答は、言葉も意味も知っている77.1%、言葉だけ知っている21.7%、全く知らない1.2%であり、全く知らない割合は1.2%であった。ほぼ全員がSDGsを知っていることがわかった。

(2) SDGsアイコンの認知度

17の目標が掲げられているSDGsアイコンについて、よく知っている42.2%、時々見る57.8%、見たことがない0%であった。全員が目にはしたことがあることがわかった。

(3) 日頃から意識して行っているSDGs行動

日頃から意識して行っているSDGs行動について、該当すると考えられる達成目標と一緒に表2に示した。56%の学生がエコバッグを使う、と回答し、次いで節電、節水をする24%、水筒を使う21%であった。

表2 日頃から行っているSDGs活動

日頃から行っているSDGs行動	目標	人数	%
食材を無駄なく使う、ご飯を残さず食べる	G 2	7	8
食べられる分だけ盛り付ける	G 2	2	2
節電、節水	G 7	20	24
エコバッグを使う	G12	47	56
水筒を使う	G12	18	21
ペットボトルやダンボール、ブルタブ、服、牛乳パックなどをリサイクルする	G12	6	7
ごみの分別	G12	5	6
フリマアプリ、リサイクルショップの利用	G12	3	4
使っているものを長く使う	G12	2	2
何かを買う時、必要な分だけ買う	G12	2	2
紙ストロー、ラベルレスペットボトルを買う	G12	1	1

*複数回答可

(4) 短大で行えそうだと思うSDGs活動

短大で行えそうだと思うSDGs活動について該当すると考えられる達成目標と一緒に表3に示した。絵本の読み聞かせ会24%、古着、不要品のフリーマーケット19%、色々な人との交流会を行う14%であった。

(5) 各目標をふまえて保育で行えそうだと思うSDGs活動の程度

各目標をふまえて保育で行えそうだと思うSDGs活動の程度について、結果を図1に示した。

表3 短大で行えそうなSDGs活動

短大で行えそうなSDGs活動	目標	人数	%
絵本の読み聞かせ会	ほぼ全部	20	24
古着、不用品のフリーマーケット	G12	16	19
色々な人との交流会を行う	G 5・11	12	14
節水・節電とその呼びかけ	G15	8	10
廃材や古着等のリメイク、展示	G12	8	10
募金	G1	5	6

*複数回答可

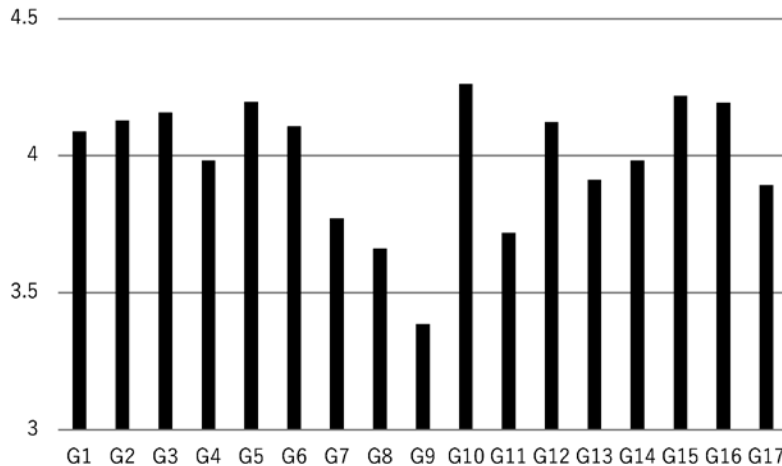


図1 各目標をふまえて保育で行えそうだと思うSDGs活動の程度

行えそうと思う程度が高かったことは、

G10：状況に関係なく職員が誰にも平等に関わり、その精神を子どもたちに見せる（4.26）

G15：子どもたちに緑や生命の大切さを伝え共に守ろうとする（4.22）

G5：性別の固定観念にとらわれない保育を提供し、子ども一人ひとりの個を尊重して関わる（4.20）

G16：子どもの最善の利益を確保し、子どもたちが心身ともに健やかに育つ場を提供する（4.19）

G3：子どもの人権を尊重し、虐待や差別、偏見のない環境をつくる（4.16）、であった。

一方、特に難しいと感じたことは、

G9：新しいものを積極的に取り入れ、子どもたちの知的好奇心や探究心を育むこと（3.39）であった。

考 察

研究2の目的は、保育者を目指す学生のSDGsに関する認識を明らかにすることであった。SDGsの認知については、言葉も意味も知っている77.1%で、言葉だけ知っている21.7%、と合わせると98.8%に認知されており、ほぼ全員が知ってはいるが、詳しい内容まで知らない者も20%強存在することがわかった。

SDGsを考慮した行動で実践していることについては、エコバッグ、マイボトルの使用、節電、節水が多く、先行研究での割合が高かったゴミの分別、ゴミの削減についての行動をする者は少ないことがわかった。

また、保育で行えそうと思う程度が高かったことは、

G10：状況に関係なく職員が誰にも平等に関わり、その精神を子どもたちに見せる（4.26）

G15：子どもたちに緑や生命の大切さを伝え共に守ろうとする（4.22）

G5：性別の固定観念にとらわれない保育を提供し、子ども一人ひとりの個を尊重して関わる（4.20）

G16：子どもの最善の利益を確保し、子どもたちが心身ともに健やかに育つ場を提供する（4.19）

G3：子どもの人権を尊重し、虐待や差別、偏見のない環境をつくる（4.16）、であった。

以上より、本学学生は、子ども一人一人を大切に（愛する）ことを行えそうと思う程度が高かったということがわかる。これは、授業や学生生活を通して、敬天愛人という建学の精神が身につけているのではないかと考えられる。

一方で、G9：新しいものを積極的に取り入れ、子どもたちの知的好奇心や探究心を育むことを難しいと感じていることから、好奇心、探究心をまずは学生が育めるような大学での教育を考える必要がある。

総合考察と展望

本研究は、保育者を目指す本学の学生のSDGsに対する認識を明らかにするとともに、保育者を目指す学生が、持続可能な社会の創り手となるべく、ESDの実践のあり方を検討することを目的とした。

日常生活において実践していることの項目で、エコバッグ、マイボトルの利用という個人的なことは行っていたが、先行研究で多かったゴミの分別、リサイクルの実践が低かった。自分事以外のことができていないと考えられる。そのため、学校全体でゴミの分別やリサイクルを学生が実践できるよう指導やしくみを学生と検討する必要がある。

各目標をふまえて保育で行えそうだと思うSDGs活動については、研究2の考察でも述べたが、新しいものを積極的に取り入れ、子どもたちの知的好奇心や探究心を育むことを難しいと感じていることから、好奇心、探究心をまずは学生が育めるような大学での教育を考える必要がある。

大学での教育を考えると、はじめに、で述べたように知識・理解に留まらず、学びを活かし、様々な問題を「自分の問題」として行動する「実践する力の育成」を目指すESDを基に考える必要がある。探究的な学習過程を重視し、学習者を中心とした主体的な学びの機会を充実し、体験や活動を取り入れることが望まれる。学生が主体となって臨める授業、学生が主体となる授業以外の様々な活動を行うことが望まれる。

授業や学生が行う活動を検討する上で、宮原（2024）の“栄養士養成課程の短期大学生におけるコンポストバッグを利用した食の循環型学習に関する研究”は大変参考になる。調理実習で出る生ゴミで堆肥を作り、学内に所有する農園で野菜やハーブの栽培に活用している。また、学生が学食を運営し、からだの調子を整えるランチを提供する。献立の作成、レシピ開発、集客方法の検討、接客、チームワーク、仕入れの予算管理等、実践力を強化することを目的としている。その際、提携しているJAで売れ残った野菜を無償提供してもらい学食で使うという食品ロスの削減につながる活動も取り入れている。まさに、学生が主体となる授業を通してESD：持続可能な社会の創り手を育む教育が展開されている。

本学は、保育者を養成する短大である。SDGsの目標の一部に焦点を当てた活動ではなく、宮原に倣い、学生が主体となり、新しいものを積極的に取り入れ、子どもたちの知的好奇心や探究心を育める保育者養成を目指した総合的な取り組みを検討する必要がある。

参考文献

- 伊坂裕子、眞嶋麻子、富士原雅弘、SDGsに対する大学生の意識と行動 ―関係流動性・環境関連科目受講行動との関連― 日本大学国際関係学部生活科学研究所報告 45、2023、27-38
- 井村奈穂、小塚諭、大学生を対象としたSDGsと廃油石鹸に関する意識調査、修文大学紀要 (13) 2021、1-10
- 岩間叶実、片桐正敏、川邊淳子、教員養成系大学生のSDGsに対する認知度および意識調査、北海道教育大学紀要、教育科学編 72 (1)、2021、377-385
- 尾上恵子、大学生におけるSDGsへの意識・取り組みの現状と心理的影響に関する調査、修文大学短期大学部紀要 62、2023、19-28
- 株式会社ネクサス、保育とSDGs ―今さら聞けないSDGsの基本と保育園ができる取り組み 国際連合広報センター https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/31737/ (2025年1月20日閲覧)
- 佐藤千洋、SDGs に関する意識調査報告：宮城学院女子大学学生のアンケートから、宮城学院女子大学研究論文集 (136)、2023、91-104
- 藤井辰朗、大学生のSDGsに対する認識の現状と課題 業経済探究 7、2024、43-54
- 宮原葉子、江崎翠、吉川志穂、仁後亮介、松尾星、吉田日和、木村香奈恵、皆倉愛香里、森脇千夏、栄養士養成課程の短期大学生におけるコンポストバッグを利用した食の循環型学習に関する研究 (第1報)、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 56、2024、199-208
- 文部科学省：持続可能な開発のための教育 (ESD：Education for Sustainable Development)